

浅野大喜

リハビリテーションのための発達科学 入門—身体をもった心の発達

森岡 周

(畿央大学教授・理学療法学)

親の誰もがわが子の発達を信じている。生まれてきた子どもが成長していくということは、自然が与えてくれた力であるから。しかしながら、何らかのきっかけで発達がうまく進まない子どもも存在する。この子どもたちには目に見える形で運動障害や知的障害が現れる。療法師は目に見える運動や知能を何とか向上させようと、それに着眼した評価・介入を行う。その手段は、いわゆる正常と呼ばれる運動等と比較して、そこから逸脱した要素を列挙し分析するものである。けれども、生物学的なヒトを意識するあまり、この一連のプロセスには、それに関わる療法師自身の影響を含んでいない。

本書は序章と終章を含め5章で構成されているが、その見出しは「他者との出会い」「自己身体の見見」「他者身体の認識」「他者行動の模倣・再生」「発達科学から発達リハビリテーションへ」である。著者の主張は一貫して、人間の発達は他者との出会いによって生まれ導かれるというものであり、それが膨大な発達科学の原著論文をレビューしながら説明されている。なかでも、身体性や模倣に関する知見に詳しい。子どもが親を模倣し学習するという事実だけでなく、大人が子どもの行動を模倣するといった逆模倣や相互模倣

の重要性が説かれ、この関係性は行為の学習だけでなく、他者の意図の類推といった心の理論の獲得や、情動を共有することによる認知やコミュニケーションを促進させる作用を持つことが示されている。親が子に対して興味を示すといった当たり前の行動こそが発達の源である根拠が示されているのである。

さて、リハビリテーション(以下、リハ)の中で発達障害領域に対する取り組みの独自性が多くの人に認知されて以来、約半世紀が経過する。しかし、その時々で進歩のためのパラダイム転換が起こってきたのだろうか。本書のまえがきに示された著者の体験に語られているような無力さは、たぶん小児リハに携わる誰しもが経験するのではないだろうか。本書は、少なくとも小児リハの進歩のためのパラダイム転換の起爆剤になるであろうと確信する。なぜなら、発達障害に対するリハであったにもかかわらず、これまでその理論と実践の中に発達科学の視点が欠落していたからである。そのことに私たちの注意を強く促し、欠けている重要な視点を補完する意味で本書の役割は大きい。評者として敢えて課題を言うならば、情動発達や共同注意の役割が記述されていなかったことであり、今後、これらの知見を追加され、さらに充実した内容になるよう期待したい。

いずれにしても、本書は多くの療法師や関係職種の皆様に手にとっていただきたい良書として、自信を持って薦めることができるものである。

●A5判・128頁・1色刷

定価 2,100円(本体2,000円+税)

2012年 協同医書出版社・刊